

平成二十六年年度『もりおかの短歌』冬の部  
選定十首及び講評

岩手路の 雪の舞に 包まれて

聴こえる母の

おかえりなさい

栃木県栃木市 辻 泰臣

美酒を飲み

ゆったりとした朝迎え

雪踏みしめて今日が始まる

青森県八戸市 重田 博

如月きげつに 春近しと立つ鳥に

弥生やよいの雪冷えゆきび

伝えるつすべなし

盛岡市 石川 節子

ふるさを くりかごにして

歌よめる

二月生まれの 詩人を思ふ

おも

盛岡市 西川 政勝

ほのぼのと

ゆらぎやさしき雪灯ひを見つめ

何想いしや佇める友

盛岡市 高橋 ミキ

雪どけの

中津川の せせらぎは

楽しく遊ぶ 童子こらに 似て

盛岡市 藤田 三喜子

もりおかに

浅葱出れば春近し  
あさじぎ

母の言葉に酔味噌和え造る  
すみそあえ

盛岡市 堀米 公子

雪どけを待たずに咲きし

石割の梅花の香り  
いしわり ばいか

天満の丘

盛岡市 村松 善

ハマナスの 町から届く

冬の幸

味わいながら エールを送る

盛岡市 赤坂 昌信

もう祖母の生家せいなけれど

か 冬涸れぬ大慈清水に

あおなあらえる

青菜洗へる

神奈川県横浜市 伊藤 修文

【講評】

盛岡を訪ね、あるいは盛岡で暮らしていながら目にした風景、出会った味を温かな心で詠んだ作品がたくさんありました。そしてまた「歌に詠んでみたい」という欲求が自然と湧き起こったのでしよう、瑞々しい作品ばかりでした。

平成二十七年三月選

啄木ソムリエ・山本 玲子